

# 中学生の読書の現状と問題点

依岡道子

## The Actual State of Reading among Junior High School Students and Sveral Points

Michiko YORIOKA

### 緒 言

アメリカでは1987年を「読書推進年」「The Year of the Reader」として議会が決議したということである。これは文盲の解消、識字率低下防止等を含む読書運動を展開することを目的としたものである。アメリカと日本では、社会的文化的事情は異なるであろうが、日本ではニューメディア化が進むにともない、活字離れ、本離れが子どもから大人まで進んでいることが憂慮されている。

情報化社会になって以来、知識・情報の獲得に迅速性が要求され、又それが容易になった。学校でも、マルチメディアに関心が払われ、音声や映像などの教育教材が教室や学校図書館にも持ち込まれることが多くなり、迅速性や能率性が求められる。その反面、読書に時間をかけ、本を通して心を自由に遊ばせ、またその思想を汲みとるという余裕を失いつつある。読書離れは起るべくして起っているといえよう。新しい時代の読書の意義を再考し、アメリカとは異なった意味で、日本でも読書推進をもう少し真剣に考える時にあると思われる。1985年から「子どもと読書」というテーマで子どもの読書の現状を調査してきたが、1986年に実施した中学生への読書調査の結果に基づいて、中学生の読書の現状を把握し、問題点を探り、今後の読書指導に求められている点を考慮したい。

### 中学生の読書調査とその分析

#### 読書調査対象校

中学生対象の第1回読書調査を1986年2月に実施したが、時期的に適当でなかったため、第2回を全国学校図書館協議会・毎日新聞社の全国読書調査に合わせて1986年6月に行った。質問項目を前回の4項目から13項目に増やし、中学生の読書量から読書内容、読書に対する意識をも含めて調査した。調査の対象校は名古屋3校岐阜県1校の公立中学校と第1回の調査と同様に西宮市の男子私立学校1校である。調査した生徒数は〈表

表1 調査生徒数

	1 年		2 年		3 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
A 中学校	20	20	21	21	24	21
B 中学校	17	22	22	19	23	18
C 中学校	21	18	22	18	20	20
D 中学校	—	—	※67	60	—	—
小 計	58	60	132	118	67	59
K 中学	186	—	180	—	181	—

※D校の都合で、2年生のみ3クラスの調査になった。

1) のとおりである。

学校図書館法では、「学校図書館の専門的職務を掌らせるため、司書教諭を置かねばならない」とあるが、その一方特例として「当分の間、司書教諭を置かないこともできる」と記されている。この為、名古屋市では司書教諭の資格を有する先生の数が多いにもかかわらず、発令数はゼロという実状である。

今回の調査校である公立中学校にも当然、司書教諭はもとより、学校司書もない。しかし各校とも図書係の先生方が読書指導や図書館の利用指導に熱心で、工夫を凝らして読書の時間を出来る限り持つよう努力していることが報告されている。

他方、私立K中学の場合、教科として1年生から3年生までの3年間、週1時間の「読書科」が設けられていて、司書教諭が授業を担当している。更に、クラス担任も読書指導や生徒への本の推薦リスト作成に協力している。公立中学校A・B・C・D校と私立K中学においては、読書環境に差異はあるが、それが読書調査で如何なる結果をもたらすか、又全体的に中学生の読書への関心の程度と読書に対する意識に注目したい。

### 1 か月間の読書量と不読者

全国学校図書館協議会と毎日新聞社の全国読書調査結果による「1 か月間の平均読書冊数の推移」(図1-1)を見ると、1986年5月1 か月間の中学生1人当り平均読書冊数は、1.8冊であり、前年度の1.9冊より若干下っている。全国の学年別平均冊数では、(図1-2)のように1年男子1.9冊、女子2.5冊、2年男子1.3冊、女子2.4冊、3年男子1.2冊、女子1.5冊である。私の調査校での1 か月間の平均読書冊数は(表2)にあるように、公立中学1年男子2.6冊、女子3.5冊、K中学3.8冊、公立2年男子2.0冊、女子3.0冊、K中学3.2冊、公立3年男子1.9冊、女子1.8冊、K中学2.9冊である。各学年とも全国平均の冊数を上回っているが、これは先に述

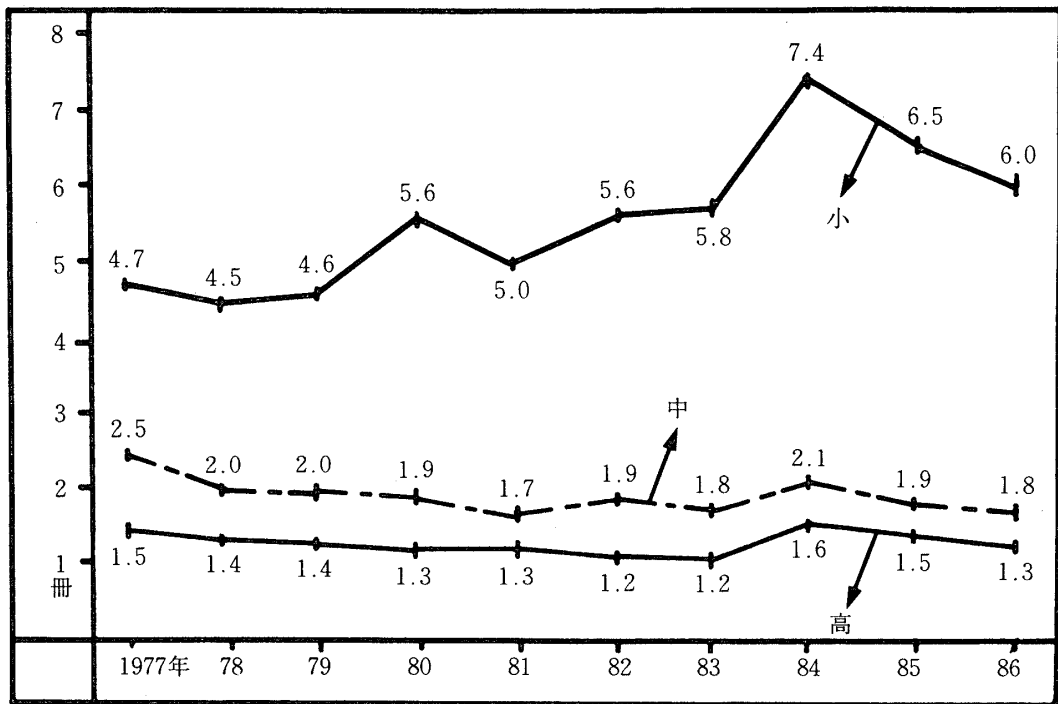


図1-1 1人当りの平均読書冊数の推移(全国調査)  
(図1-1, 1-2, 1-3は『学校図書館・速報版』1986年10月25日より)

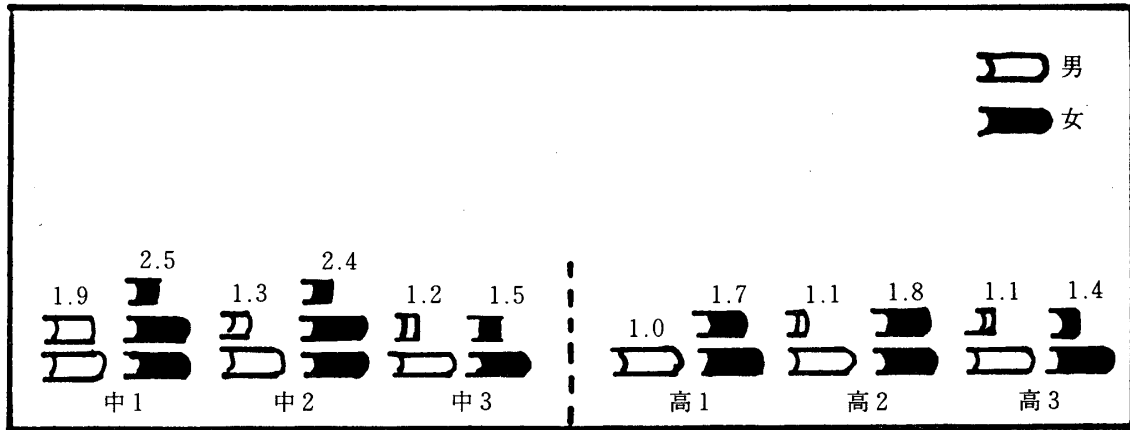


図1-2 5月1か月間の1人平均読書冊数 (全国調査)  
(マンガ・雑誌を除く)

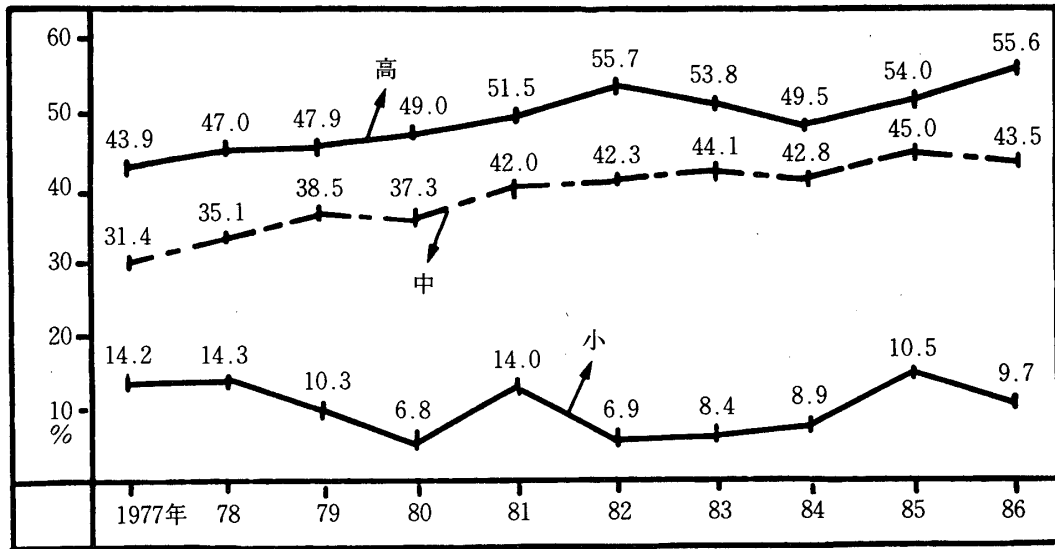


図1-3 不読者(0冊)の割合の推移 (全国調査)

べたように、私の調査校の中には、読書指導に熱心な先生がいる学校が含まれていたからであろう。

1冊も本を読まなかった「不読者の推移」(図1-3)を見ると、全国の中学生の平均が、43.5%となっている。不読と多読の割合を私の調査校と全国平均との間で比較してみると(表3)、全国平均では1年生33%、2年生47%、3年生51%と各学年とも高い率を示している。私の調査校では各学年とも全国平均の不読者の率より低くなっている。しかし、一例としてはあるが、名古屋市のある中学校における3年生対象の調査で、不読者数が全体の72%に達したという報告があり、3年生になると本から遠ざかるという現象がはっきり現われており、これは問題の1つだと言える。

#### 生徒の読書傾向

1か月間に読んだ本の名前の実数上位の作品が(表4)にある。男子の場合『シャーロック・ホームズの冒険』とそのシリーズや『坊っちゃん』が各学年に共通して読まれており、女子は『三毛猫ホームズ』『死者の学園祭』『いつか誰かが殺される』など赤川次郎の作品が多く

表2 5月1か月間の読書冊数(マンガ・雑誌を除く)

冊数	1 年				2 年				3 年			
	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中
0	17	3	20	14	52	33	85	27	20	18	38	32
1	9	16	25	42	28	22	50	28	20	15	35	41
2	13	12	25	36	21	15	36	35	13	13	26	27
3	8	9	17	22	6	16	22	34	6	3	9	32
4	4	5	9	21	14	11	25	11	0	5	5	16
5	1	6	7	7	3	4	7	18	4	1	5	12
6	1	3	4	9	1	3	4	7	0	1	1	3
7	1	0	1	10	0	0	0	1	1	1	2	6
8	0	1	1	5	0	4	4	3	1	1	2	1
9	1	1	2	5	1	0	1	2	0	0	0	1
10	2	1	3	4	1	4	5	5	1	1	2	3
10以上	1	1	2	11	4	6	10	9	1	0	1	7
無回答	0	2	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0
計	58	60	118	186	132	118	250	180	67	59	126	181
平均冊数	2.6	3.5	3.0	3.8	2.0	3.0	2.5	3.2	1.9	1.8	1.9	2.9

表3 不読と多読の割合—全国的な調査との比較

	1 年			2 年			3 年		
	全 国	A・B・C	K 中	全 国	A・B・C・D	K 中	全 国	A・B・C	K 中
0冊	33	17	8	47	34	15	51	30	18
1～9冊	64	81	86	50	62	80	47	69	78
10冊以上	3	2	6	3	4	5	2	1	4

備考—全国の数字は、『学校図書館・速報版』(1986年10月25日)より。

無回答を省略し、四捨五入で計100%とした。

読まれ、軽読書化が中学生の女子の方に広がっていることが分かる。

一方、K中学では生徒が読んだ本の名前の上位に来る作品の実数にはまとまりがある。例えば、各学年の1位は、1年生の『ライオンと魔女』19人、2年生の『トムは真夜中の庭で』25人、3年生の『沈黙』45人である。これはK中学の『推薦図書リスト』のもたらし結果であろう。K中学では、各学年とも1年間に15冊以上の本も読むことが要求されている。内訳は、1学期3冊、夏休み3冊、2学期3冊、冬休み2冊、3学期2冊、春休み2冊である。更に、読後は読書ノート欄に記録をとることになっている。『推薦図書リスト』には約130冊の本が掲載されている。表の中には含まれていないが、K中学の生徒の読んでいる本の下位の方には、生徒達の好みを物語るような『怪人二十面相』や『大暗殺』など少年探偵団シリーズが見られる。

関連して、「今まで読んだ本の中で、よかったと思う本を書いて下さい」という質問について、全国調査の結果を見てみると、中学校男子1年生から3年生まで『坊っちゃん』が1位に

表4 5月1か月間に読んだ本の名まえ

〈1年生〉		A・B・C校 男子		A・B・C校 女子		K 中 学		
順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数	
1	坊っちゃん	3	1	オズの魔法使い	4	1	ライオンと魔女	19
	ファール昆虫記	3	2	銀河鉄道の夜	3	2	エミールと探偵たち	18
2	シャーロック・ホームズの冒険	2		不思議の国のアリス	3		二年間の休暇	18
	1リットルの涙	2		秘密の花園	3	3	ロビン・フッドのゆかいな冒険	13
	(以下略)			なんてすてきにジャパネスク2	3	4	名探偵カッレくん	12
				死者の花園	3	5	シャーロック・ホームズの冒険	9
				モ モ	3		坊っちゃん	9
				さと子の日記	3		ドリトル先生アフリカゆき	9
				(以下略)			(以下略)	
〈2年生〉		A・B・C・D校 男子		A・B・C・D校 女子		K 中 学		
順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数	
1	シャーロック・ホームズ(シリーズ)	8	1	三毛猫ホームズ	10	1	トムは真夜中の庭で	25
2	船乗りクアックアの冒険	5	2	いつか誰かが殺される	5	2	ホビットの冒険	23
3	坊っちゃん	4	3	寝台列車あかつき号殺人事件	4	3	モ モ	21
4	マンボウ周遊券	3		死者の学園祭	4	4	星の王子さま	13
	マンボウ博士と怪人マグゼ	3		丘の家のミッキー	3	5	アンネの日記	11
	(以下略)			悲劇の少女アンネ	3	6	ドリトル先生アフリカゆき	7
				(以下略)			魔術師のおい	7
							カスピアン王子のつるぶえ	7
							(以下略)	
〈3年生〉		A・B・C校 男子		A・B・C校 女子		K 中 学		
順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数	
1	ブラックホール	3	1	三姉妹探偵団	5	1	沈黙	45
2	異西部の剣士	2	2	殺人よこんにちわ	3	2	アメリカ合衆国	6
	坊っちゃん	2		真夜中のアリス	2		文化人類学入門	6
	20倍の集中力	2		(以下略)			黒曜宮の陰謀(グインサーガ21)	6
	未来イソップ	2				3	マヤ文明	6
	冒険者たち	2					運命の一日(グインサーガ22)	6
	立ってみなさい	2					風のゆくえ(グインサーガ23)	6
	明るい人生	2					(以下略)	
	マキコは泣いた	2						
	(以下略)							

来て、その後『ああ無情』や『走れメロス』『銀河鉄道の夜』などが比較的多く選ばれており、男子は古典的な作品を好む傾向があらわれている。女子では『ヘレン・ケラー』『さと子の日記』『窓ぎわのトットちゃん』となっている。(表5)にあるように、私の調査校でも公立中学男子女子とも全国的な読書傾向と大差はない。しかし、K中学の場合、他校では殆ど挙げられていない書名が上位を占めているのが特徴的である。

例えば、1年生では1位『二年間の休暇』42人(22.5%)、2位『ライオンと魔女』35人(19.4%)、2年生では1位『ライオンと魔女』35人(18.8%)、2位『影との戦い・ゲド戦記I』と『名探偵カッレくん』27人(15%)、3年生では1位『あの頃はフリードリヒがいた』48人(26.5%)、2位『アンネの日記』『ライオンと魔女』『坊っちゃん』が各々31人(17.1%)となっている。上位に位置する本は日本の作品よりも外国の作品の方が圧倒的に多いと言える。

この結果から問題点として指摘したいのは、よかったと思う本を1冊も挙げなかった生徒が公立中学校の生徒の特に男子に多かったことである。即ち、1年生で39.7%、2年生で37.1%、3年生で35.8%であり、一方K中学では1年生で4.8%、2年生で3.5%、3年生で2.2%であり、大きな差を示している。K中学の生徒がよかった本として挙げている書名の多くが、先の『推薦図書リスト』の中の本である。一方、現在出版される本の多様性を反映し、一般に中学生の読書内容は雑多である。同時に、一部の流行作家の作品に集中するという傾向が顕著であ

表5 今まで読んだ本のなかで、よかったと思う本の名まえ

〈1年生〉		A・B・C校 男子		A・B・C校 女子		K 中 学			
順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数		
1	ルパン・シリーズ	5	1	さと子の日記	10	1	二年間の休暇	42	
2	ヘレンケラー	3	2	星になったチロ	9	2	ライオンと魔女	36	
	ペーブルース	3	3	銀河鉄道の夜	6	3	エミールと探偵たち	23	
	ファーブル昆虫記	3	4	ガラスのうさぎ	6	4	ロビン・フッドのゆかいな冒険	17	
無		23	5	江戸川乱歩シリーズ	5	5	走れメロス	12	
		(39.7%)		若草物語	4	6	坊っちゃん	11	
				三毛猫ホームズ・シリーズ	4	7	ビルマの竖琴	9	
				小公女	4	8	十五少年漂流記	8	
				無	1	無		9	
					(1.7%)			(4.8%)	
〈2年生〉		A・B・C・D校 男子		A・B・C・D校 女子		K 中 学			
順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数		
1	走れメロス	13	1	走れメロス	10	1	ライオンと魔女	35	
2	坊っちゃん	9	2	ガラスのうさぎ	8	2	影との戦い・ゲド戦記I	27	
3	シャーロック・ホームズの冒険	6	3	窓ぎわのトットちゃん	6		名探偵カッレくん	27	
4	青いリングのふるさと	4	4	二十四の瞳	5	3	エミールと探偵たち	21	
5	1リットルの涙	3		ヘレンケラー	5		君たちはどう生きるか	21	
	どくとるマンボウ航海記	3	5	多恵子ガール	5	4	星の王子さま	19	
	坂本龍馬	3		さと子の日記	4		二年間の休暇	19	
無		49		シャーロック・ホームズの冒険	4	5	あの頃はフリードリヒがいた	16	
		(37.1%)		6	悲劇の少女アンネ	3	6	兎の眼	13
					恋のペリカンナイト	3	7	モモ	12
					若草物語	3	8	ホビットの冒険	11
					アンネの日記	3	9	はてしない物語	10
				無	29	無		6	
					(24.6%)			(3.3%)	
〈3年生〉		A・B・C校 男子		A・B・C校 女子		K 中 学			
順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数	順位	出度数		
1	リンカーン	3	1	アンネの日記	5	1	あの頃はフリードリヒがいた	48	
	オオサンショウウオ	3	2	さと子の日記	3	2	アンネの日記	31	
	坊っちゃん	3		窓ぎわのトットちゃん	3		ライオンと魔女	31	
無		24		青いリングのふるさと	3	3	坊っちゃん	31	
		(35.8%)		無	18	3	二年間の休暇	18	
					(30.5%)	4	影との戦い・ゲド戦記I	16	
						5	ドリトル先生アフリカゆき	14	
							ロビン・フッドのゆかいな冒険	14	
							白バラは散らず	14	
						無		4	
								(2.2%)	

る。

生徒が何故その本を読んだかという本を読む動機については、私自身未調査であるが、毎日新聞社の調査では中学生の本を読む動機は、(第1位「書名がおもしろそうだから」第2位「友人の影響で」となっている。)「読書に興味があるごく一部の生徒を除いて、テレビや映画の影響の為か女子の場合は流行作家に多くの関心が向いているようである。名古屋市のある中学校の読書アンケートによると、「今どんな作家に興味があるか」という問いに対して、男子は星新一、松本清張、女子では赤川次郎、氷室冴子、新井素子、久美さおり、高千穂はるかとなっている。

中学生が小学生と大きく違うのは、身体の発達とともに精神的自立と知的成長であろう。読書においては、小学生時代のいわゆる児童書から高校生が手にするようなヤングアダルト向きや大人の本へと移ってゆく。殊に最近のようにテレビ化映画化された作品を読む傾向が強くなると、長年にわたって中学生に読み続けられる本を見出すことが困難になってきている。

『学校読書調査25年』には毎日新聞社の25年間の読書調査の結果が集大成されている。その中で、時代を超えて読み続けられてきた本が“洗礼本”<sup>2)</sup>としてリストになっている。中学生の男子で『坊っちゃん』『吾輩は猫である』『シャーロック・ホームズ』『怪盗ルパン』『江戸川乱歩』が継続読書のベスト5であり、女子では『坊っちゃん』以外は、少女が主人公の『赤毛のアン』『若草物語』『アンネの日記』など少女路線の作品であった。これらの“洗礼本”も最近では赤川次郎作品などの影響で少しずつ変化してゆくようであり、数年後にどのような結果になっているかが気になるところである。

K中学の生徒たちが良いとみなしている作品を大別すると、(1)冒険や遊びを通して、友情を深めてゆく楽しい作品、(2)社会の問題や歴史を扱い、深い内容を持つ作品、(3)ファンタジーの作品で想像の世界を広げ、内的世界を追求する作品などである。これは生徒に本を推める際に参考になるところであり、この点については後に言及したい。

### 中学生の読書に対する意識

中学生のマンガ熱は相当なものらしいが、本やマンガをどの程度好きかという質問に対する結果が〈表6〉にある。本が「大好き」「好きなほう」と肯定的に答えている生徒が公立中学の場合1年生78.0%、2年生69.2%、3年生74.6%、そしてK中学では1年生75.3%、2年生68.3%、3年生65.7%である。マンガに関しては、「大好き」という生徒が男女とも同様に、非常に多数であり、「大好き」「好きなほう」という肯定的な回答は、公立中学K中学とも各学年90%前後である。圧倒的にマンガ党であることが分かる。

「本を好きなほう」と答えている生徒が多いのであるが、「本をよく読むほうか読まないほうか」という質問については、〈表7〉のように全体的に男女差が顕著に見られ、男子は「読まないほう」と答えた生徒が多いのに対し、女子は自ら「よく読むほう」とみなしている。更に「よく読むほう」と答えた人に対し、「何故本を読むか」について幾つかの項目を挙げて選んでもらったところ、〈表8〉のように「本はおもしろいから」が圧倒的に多く、次に「ひまつぶしになるから」「気晴らしになるから」と続いている。このように生徒は先ずおもしろい本を好む傾向にある。

一方、「本を読まないほう」と答えた生徒に対して、読まない理由を項目の中から選んでもらったところ、〈表9〉の結果が得られた。勉強やクラブ活動で忙しくて時間がないという理由を選んでいる生徒が多いことは予想通りであったが、各学年男女に共通して「読みたい本が見つからないから」と答えた生徒が多いことは意外であった。これも指導者にとって考えねばならない問題の1つと言える。K中学のように『推薦図書リスト』があっても、読みたい本が見つからないと答えている生徒がいるということは、選書の難しさを示している。推薦する本のリストもある程度、時代の変化に対応する必要がある。

K中学では学年が進むに従い「他に趣味があるから」と答えている生徒が増えているが、高学年の生徒が読書を趣味として捉える傾向は、読書の自主性の確立と決して無関係ではない。K中学では読書指導の重要な課題を自主性の問題だと考えて、(いかに組織的に整った読書指導が全校規模で行われようと、生徒の読書に対する自主性を引き出すことが出来なかつたならば、それは無に等しい。読書の本質は自由に存するからである。)<sup>3)</sup>と読書指導の方針を示している。

生徒たちが日頃読んでいる本や良いとみなしている本、最近関心のある作家の名前から推察する時、スリリングで喜劇的で深く考えることなく読み進むことができるスピード感のある作品が好まれていることが分かる。しかし読書後すぐに忘れ去られる類の消耗品的な本ではなく、

表6 本・マンガが好きか嫌いか

( )内は%

本  が	1 年				2 年				3 年			
	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中
大 好 き	6 (10.7)	13 (22.4)	19 (16.7)	38 (20.7)	17 (13.2)	26 (22.2)	43 (17.5)	21 (11.8)	8 (12.1)	12 (20.7)	20 (16.1)	16 (8.9)
好きなほう	35 (62.5)	38 (65.5)	73 (64.0)	102 (55.4)	68 (52.7)	62 (53.0)	130 (52.8)	102 (57.3)	37 (56.1)	37 (63.8)	74 (59.7)	103 (57.2)
嫌いなほう	13 (23.2)	7 (12.1)	20 (17.5)	42 (22.8)	36 (27.9)	27 (23.1)	63 (25.6)	51 (28.7)	17 (25.8)	8 (13.8)	25 (20.2)	49 (27.2)
大 嫌 い	2 (3.6)	0	2 (1.8)	2 (1.1)	8 (6.2)	2 (1.7)	10 (4.1)	4 (2.2)	4 (6.0)	1 (1.7)	5 (4.0)	12 (6.7)
無 回 答	2	2	4	2	3	1	4	2	1	1	2	1
計	58	60	118	186	132	118	250	180	67	59	126	181

マンガが	1 年				2 年				3 年			
	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中
大 好 き	32 (55.2)	28 (46.7)	60 (50.8)	104 (55.9)	64 (48.9)	82 (70.1)	146 (58.9)	93 (52.2)	25 (27.3)	32 (54.2)	57 (45.2)	68 (37.6)
好きなほう	21 (36.2)	27 (45.0)	48 (40.7)	75 (40.3)	59 (45.0)	27 (23.1)	86 (34.7)	79 (44.4)	33 (49.3)	23 (39.0)	56 (44.5)	101 (55.8)
嫌いなほう	4 (6.9)	5 (8.5)	9 (7.6)	5 (2.7)	8 (6.1)	8 (6.8)	16 (6.5)	5 (2.8)	8 (11.9)	4 (6.8)	12 (9.5)	8 (4.4)
大 嫌 い	1 (1.7)	0	1 (0.8)	2 (1.1)	0	0	0	1 (0.6)	1 (1.5)	0	1 (0.8)	4 (2.2)
無 回 答	0	0	0	0	1	1	2	2	0	0	0	0
計	58	60	118	186	132	118	250	180	67	59	126	181

表7 本を読むか読まないか

	1 年				2 年				3 年			
	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中
よく読むほう	21 (36.2)	36 (60.0)	57 (48.3)	81 (43.5)	52 (39.4)	62 (52.5)	114 (45.6)	77 (42.8)	20 (29.9)	29 (49.2)	49 (38.9)	75 (41.4)
読まないほう	37 (63.8)	24 (40.0)	61 (51.7)	105 (56.5)	80 (60.6)	56 (47.5)	136 (54.4)	103 (57.2)	47 (70.1)	30 (50.8)	77 (61.1)	106 (58.6)
計	58	60	118	186	132	118	250	180	67	59	126	181

表8 何故本を読むか

	1 年				2 年				3 年			
	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中
勉強の役に立つから	8	5	13	12	3	4	7	7	1	1	2	12
本はおもしろいから	15	34	49	69	30	53	83	66	16	26	42	77
ひまつぶしになるから	11	16	27	27	20	25	45	42	8	4	12	37
気ばらしになるから	7	7	14	19	11	19	30	26	4	4	8	24
人間の生き方を考えることができるから	1	0	1	18	7	4	13	11	2	3	5	18
ほかにすることがないから	2	5	7	7	7	7	14	15	0	0	0	8
そ の 他	3	5	8	9	6	2	8	8	0	1	1	6



表9 何故本を読まないか

	1 年				2 年				3 年			
	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中
勉強が忙しくて時間がないから	1	3	4	37	6	10	16	18	8	2	10	21
テレビを見るので時間がないから	9	8	17	37	17	18	35	39	11	7	18	44
クラブ活動が忙しくて時間がないから	8	5	13	24	27	18	45	30	4	4	8	45
読みたい本がみつからないから	19	10	29	31	36	29	65	46	11	14	25	35
他に趣味があるから	13	7	20	33	21	16	37	43	20	5	26	56
その他	4	0	4	9	11	0	11	13	5	5	10	31
無回答	1	0	1	2	1	0	1	4	0	1	1	0

表10 読書をいかに捉えているか

( )内は%

	1 年				2 年				3 年			
	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中
重要である	48 (82.8)	50 (86.2)	98 (84.5)	169 (90.9)	93 (72.7)	98 (86.0)	191 (78.9)	149 (84.7)	53 (81.5)	48 (84.2)	101 (82.8)	156 (82.7)
重要でない	10 (17.2)	8 (13.8)	18 (15.5)	17 (9.1)	35 (27.3)	16 (14.0)	51 (21.1)	27 (15.3)	12 (18.5)	9 (15.8)	21 (17.2)	23 (12.8)
無回答	0	2	2	0	4	4	8	4	2	2	4	2

冊数にこだわらず、読書から真に心の豊かさを得られるような本を読むような指導をしたいものである。指導者が生徒に推薦する時、内容的に間違いのない古典にのみ頼らず、最近の作品の中からも生徒たちに与えるに適した本を捜し出してほしい。

〈表10〉にあるように、生徒は読書を重要であると考えている。調査校全体を通じて、読書を「重要である」と答えた生徒は83%に達している。

次に、「学校図書館を利用するかどうか」については、公立中学校とK中学の間には、大きな差が見られる。K中学では「よく利用する」という生徒が格別多いことであり、又公立中学では、「利用しないほう」の生徒が多く、特に3年生では「まったく利用しない」という生徒が41.3%と高い率である。これは受験という問題に関係しているだろうが、図書館の蔵書の内容にも多少問題があるのではないだろうか。

「学校図書館にはあなたの読みたい本がそろっていますか」の結果〈表11〉を見ると、公立中学校では「あまりそろっていない」と「まったくそろっていない」と答えた生徒が多い。一方、K中学では「かなりそろっている」と答えた生徒が、全体的に見て43%に達している。名古屋市の中学校の場合、図書係の先生によると、図書館の本への予算は潤沢であるとのことだが、必要なことは図書館の本の選書にあたって、先生方に少しでも多くの本に目を通し、生徒に推薦することのできる本を見い出していただくことである。又、図書館の蔵書内容に偏りがないか、再度調査検討する必要がある。

### 中学生とファンタジー

全国読書調査と私の2回の読書調査の結果から、一般に男子では従来通り『シャーロック・ホームズ』シリーズに代表される探偵物が関心の中心であり、新に北杜夫の『どくとるマンボ

表11 学校図書館(室)について

( )内は%

図書館(室)を	1 年				2 年				3 年			
	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中
よく利用する	1	4	5	82	18	8	26	95	5	0	5	73
ときどき利用する	24	23	47	81	37	41	78	70	9	11	20	78
あまり利用しない	18	26	44	20	39	35	74	12	20	27	47	26
まったく利用しない	15	5	20	0	36	34	70	2	31	21	52	4
無 回 答	0	2	2	3	2	0	2	1	2	0	2	0

図書館(室)に 本が	1 年				2 年				3 年			
	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中	男子	女子	小計	K中
よくそろっている	9	14	23	59	5	8	13	34	5	5	10	26
かなりそろっている	22	19	41	73	25	23	48	86	7	15	22	75
あまりそろっていない	17	23	40	44	70	74	144	47	38	30	68	67
まったくそろっていない	9	2	11	2	31	11	42	7	14	9	23	12
無 回 答	1	2	3	8	1	2	3	6	3	0	3	1

ウ』シリーズなど小説よりも気軽なエッセー的な作品が加わっていることと、女子では『探偵物語』『死者の学園祭』『いつか誰かが殺される』『三毛猫ホームズ』シリーズなどの赤川次郎のライト・ミステリーを中心に軽読書の傾向が続いていると言えよう。

しかし、K中学の場合、日頃読んでいる本や良かったとみなしている本の中に、『ナルニア国ものがたり』『ホビットの冒険』『モモ』『ゲド戦記』などの外国のファンタジー作品が多いことが分かった。生徒の間でファンタジーを好む傾向が高まっていることを、K中学の読書指導科の先生も指摘していらっしゃるし、司書教諭の先生によると、ファンタジー作品は図書館の蔵書として買い足しても買い足しても貸し出しの需要に応じきれないということである。更に、夏休みの読書感想文を書くために生徒たちがとりあげる作品として『ゲド戦記』や『ナルニア国ものがたり』がここ数年目立っていることから、いかに生徒たちが良質のファンタジーを求めているかが理解される。

(ファンタジーというのは、多重構造の世界のただなかに自分をおいて生きている自分というものを、身近なところで再確認する、いや初めて認識するためのインデックスなのだ)<sup>4)</sup>と小原信は言っているが、それでは何故中学生はファンタジーを好むのだろうか。勿論最近ファンタジー作品が多く出版され、それらがアニメーションとして映画化されていることも1つの理由であろう。

ファンタジーは人間の内面的自由の発想であるが、(内面的自由というのは、人間の主体性とかかわっている。子どもが飢えているのは、この内面的自由であり、主体性なのではあるまいか)<sup>5)</sup>とK中学の先生は述べている。中学生がファンタジーを好むのは、この内面的自由という飢えをファンタジーが幾分なりとも癒してくれるからであろう。

書物は本気で時間をかけて付きあわなければ、なかなかそのメッセージを受けとることができないが、ファンタジーも同様であり、時間をかけて読めば、現実のなかでわれわれが見逃している多くの大切なメッセージを読みとることができる。ファンタジーを読んだあとには、不

思議な感動を覚え、更に、何か啓示のようなものを感じることもある。中学生に必要なのは、この名伏しがたい感動である。感動の時は深く心に刻まれる時であり、人生におけるそういう時は決して多くはない。中学生時代にしか持てない心の充実した時を持つことができるような読書を、中学生に経験させることが望まれる。

## ま と め

生徒に本を「読ませる」ということは「読む」ということと同じではない。しかし生徒の自主性に任せておいて「読む」ということが養われることは難しい。「読む」という自由な行為は、実は見かけとは正反対の「読ます」ことから生じる「読まされる」ことによって触発される)<sup>6)</sup>という読書指導者のことばは、傾聴に値する。勿論K中学のように読書科という教科を設置することが望ましいが、それが不可能な現在、少なくとも教師は自らの経験に基づき、読書の意義とその方法を生徒たちに語ってほしい。読書指導の目的は、生徒が読書習慣を身につけることに加え、生徒に自主性と主体性を身につけさせることであるのだから、生徒たちが自分の生活の中に読書の時間を見い出す工夫をし、自ら自分に適した本を捜し出す努力をすることができるよう読書環境を整えることが今必要なことである。

## 注

- 1) 学校読書調査25年, 104, 毎日新聞社 (1980)
- 2) 同上書, 11
- 3) 小林宏: 読書する中学生, 101, 関西学院中学部 (1985)
- 4) 小原信: ファンタジーの発想, 255, 新潮社 (1987)
- 5) 小林宏: 中学生教育のあゆみ, 15, 4, 関西学院中学部 (1985)
- 6) 3) に同じ